

鉄筋コンクリート造 耐震改修時の読み合わせ用資料について

読み合わせ用資料として下記の資料を提出してください。

なお、資料を提出の際には、**片面印刷のうえ、クリップ止め**としてください。

(両面印刷やホッチキス止め、穴あけ紐止めでの提出はやめてください。)

- ・ § 3 建築物及び耐震診断結果概要

- 3.1 建築物概要及び構造概要

- 3.2 耐震診断概要

- 3.3 耐震診断結果

- 3.4 耐震改修建築物概要及び構造概要

- 3.5 耐震改修概要

- 3.6 耐震改修結果

- 3.7 配置図

- 3.8 意匠図(改修前後の平面図・立面図)

- 3.9 構造図(改修前後の伏図・軸組図 改修詳細図)

- 3.10 破壊形式図

- ・ 質疑回答書(委員会、小委員会)

報告書の § 1と同じ内容ものを添付してください。

次ページからの参考例に注意事項等を示していますので、確認して提出してください。

参考例は、上記の要領でまとめていますが、§ 3の内容を下記要領で、タイトル等を整理しても問題ありませんが、**意匠図、構造図の順番**は守ってください。

§ 3 建築物及び耐震診断結果概要

- 3.1 現況の建築物及び耐震診断結果概要

- 3.1.1 建築物概要及び構造概要

- 3.1.2 耐震診断概要

- 3.1.3 耐震診断結果

- 3.2 改修後の建築物及び耐震診断結果概要

- 3.2.1 耐震改修建築物概要及び構造概要

- 3.2.2 耐震改修概要

- 3.2.3 耐震改修結果

- 3.3 配置図

- 3.4 意匠図

- 3.4.1 改修前の平面図・立面図

- 3.4.2 改修後の平面図・立面図

- 3.5 構造図

- 3.5.1 改修前の伏図・軸組図

- 3.5.2 改修後の伏図・軸組図・詳細図

- 3.6 破壊形式図

報告書の § 1と同じ内容ものを添付してください。

「3. 4意匠図」は改修前後の平面図と立面図が、「3. 5構造図」は改修前後の伏図と軸組図、改修後の詳細図が添付されていればまとめ方は問いません。ただし、**意匠図、構造図の順番**は守ってください。

※評価書には建築物概要及び耐震診断結果概要、配置図、意匠図(改修前後の平面図、立面図)が添付されます。

※報告書の § 1 を § 3 に変えてください。

§ 3 建築物及び耐震診断結果概要

3.1 建築物概要及び構造概要

注意事項には ☐ をしています。

(診断：〇〇評価委員会の評価番号〇〇〇より)

発注者		〇〇〇			
耐震診断	診断者	〇〇〇		※報告書は発注者の承認を得ていることなどを記述する。	
	診断者住所	〇〇〇			
	診断年	平成〇〇年〇〇月			
	診断評価番号	HA〇 34-00-0000			
建築物概要*耐震診断	診断建物名称		〇〇〇		建築物の特徴 ※下記の項目などを記述する。 ・建築物の軸線 ・増築の有無 ・増築・改修の時期 ・外壁、屋根の仕上げ ・建物形状の特徴 ・床面積の内訳 ・隣接建物 ・EXP. Jの間隔、高さ比 ・避難階段・滑り台の有無、接合方法 ・その他重要事項
	診断建物所在地		〇〇〇		
	診断建物設計者		〇〇〇		
	診断建物施工者		〇〇〇		
	診断建物規模		地上	〇 階	
			地下	〇 階	
			塔屋	〇 階	
	診断建物竣工年		昭和〇〇年		
	主要用途		〇〇〇		
	主要仕上		外壁	〇〇〇	
			屋根	〇〇〇	
	建物形状	平面形	〇〇〇		
		立面形	〇〇〇		
	建物面積	建築面積	〇	m ²	
		延べ面積	〇	m ²	
		〇 階	〇	m ²	
	建物高さ	軒高さ	〇	m	
〇 階		〇	m		
建物長さ	X方向	〇	m		
	Y方向	〇	m		
隣接建物		〇〇〇			

改修の場合忘れずに記入してください。

(診断：評価番号〇〇〇より)

構造概要＊耐震診断	構造種別		〇〇〇		構造の特徴
	架構形式	X方向	〇〇〇		※下記の項目などを記述する。 ・ 架構形式
		Y方向	〇〇〇		
	スパン数	X方向	〇	スパン	・ 極脆性柱の位置 ・ 下階壁抜け柱の位置 ・ 大スパン梁の位置 ・ 持出し部材の位置
		Y方向	〇	スパン	
	スパン長	X方向	〇	m (代表スパン)	
		Y方向	〇	m (代表スパン)	
	極脆性柱	X方向	極脆性柱の有無		
		Y方向	極脆性柱の有無		
	下階壁抜け柱	X方向	下階壁抜け柱の有無		
		Y方向	下階壁抜け柱の有無		
	大スパン梁	X方向	大スパン梁の有無		
		Y方向	大スパン梁の有無		
	持出し部材	X方向	持出し部材の有無		
		Y方向	持出し部材の有無		
	層重量	〇 階	〇	kN	
	単位重量	〇 階	〇	kN/m ²	
	柱壁量	〇 階	X方向 〇	Y方向 〇	
	基礎地盤	基礎形式	〇〇〇		・ 地盤
長期支持力		〇〇〇			
支持層		〇〇〇			
支持深さ		〇〇〇			
地盤種別		〇〇〇			
敷地状況		〇〇〇		・ 敷地	
その他	〇〇〇		・ その他重要事項		

(診断：評価番号〇〇〇より)

使用材料・強度＊耐震診断	既存コンクリート	強度	設計基準強度	<u>0</u> N/mm ²	材料の特徴 ※下記の項目などを記述する。 ・コンクリート強度、中性化の内訳
		<u>0</u> 階	推定強度	<u>0</u> N/mm ²	
		中性化	基準値	<u>0</u> mm	
			測定値の最大	<u>0</u> mm	
		各階の中性化深さ	<u>0</u> 階 <u>0</u> mm		
	既存鉄筋		材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
		主筋 帯筋 あばら筋 壁筋 スラブ筋	<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²	
<u>〇〇〇</u>			<u>0</u> N/mm ²		
既存鉄骨	柱 梁	材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）	
		<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²		
	ボルト	材質	引張強度	・鋼材の引張強度の根拠（割増の有無）	
		<u>〇〇〇</u>	<u>0</u> N/mm ²		
その他		<u>〇〇〇</u>	・その他重要事項		

3.2 耐震診断概要

(診断：評価番号〇〇〇より)

現 地 調 査 ＊ 耐 震 診 断	設計図書の有無	<u>〇〇〇</u>	特記事項
	被災履歴	<u>〇〇〇</u>	※下記の項目などを記述する。
	図書の照合	<u>〇〇〇</u>	・調査方法、箇所について発注者と協議
	ひび割れ劣化	<u>〇〇〇</u>	・左記項目の内、重要な項目
	不同沈下	<u>〇〇〇</u>	・C A D化した図面の発注者の承認
	部材寸法	<u>〇〇〇</u>	
	基礎状況	<u>〇〇〇</u>	
	コンクリートブロック	<u>〇〇〇</u>	・コンクリートブロック
	非構造部材	<u>〇〇〇</u>	・非構造部材
	その他	<u>〇〇〇</u>	・その他重要事項 ・鉄骨がある場合はその他で記載する。

(診断：評価番号〇〇〇より)

モデル化および計算手法＊耐震診断	節点振り分け	<u>〇〇〇</u>	特記事項
	仮想仕事法	<u>〇〇〇</u>	※下記の項目などを記述する。
	荷重増分法	<u>〇〇〇</u>	・回転壁
	解析用外力分布	<u>〇〇〇</u>	・外力分布
	剛床・ゾーニング	<u>〇〇〇</u>	・使用プログラム、バージョン
	部材内法寸法位置	<u>〇〇〇</u>	・その他重要事項
	壁	<u>〇〇〇</u>	
	下階壁抜け柱	<u>〇〇〇</u>	
	軸力変動	<u>〇〇〇</u>	
	柱耐力	<u>〇〇〇</u>	
	梁耐力	<u>〇〇〇</u>	
	第2種構造要素	<u>〇〇〇</u>	
	偏心率の算出方法	<u>建防協のB法による。</u>	
	使用プログラム	<u>〇〇〇</u>	

3.3 耐震診断結果

(診断：評価番号〇〇〇より)

耐震診断基準	※診断基準は、採用した主たる基準を記述し、準拠した基準も列記する。			
耐震診断次数	〇〇〇			※発注者と協議を記述する。
耐震診断諸数値	地域係数：Z = 0.00 用途係数：U = 0.00 地盤指標：G = 0.00 振動特性係数：R _t = 0.00 経年指標：T = 0.00 RC造：S _T = 0.00 形状係数S _D は建防協のB法とする 外力分布補正係数はAi分布とする。			※発注者と協議を記述する。
	RC造：I _s = E _o ・T・S _D / (Z・R _t ・G)			
	RC造：q = C _{TU} ・S _D / (S _T ・Z・G)			
耐震診断判定指標	I _{so} = 0 q ≥ 0			※発注者と協議を記述する。
耐震診断結果	X方向			考察
	階	I _s 値	q値	判定
	1階	0.00	0.00	〇〇〇
	Y方向			・第二種構造要素
				・極脆性柱
	階	I _s 値	q値	判定
	1階	0.00	0.00	〇〇〇
				・下階壁抜け柱
				・判定結果考察
	特記事項			
	※下記の項目などを記述する。			
	・コンクリート強度			
	・地盤			
	・コンクリートブロック			
	・非構造部材			
	・隣接建物			
	・大スパン			
	・持出し梁			
	・鉄骨			
	・詳細な調査の必要性			
	・改修の必要性			
	・補修の必要性			
	・その他重要事項			

X 方向												
	階	ΣW (kN)	E_o	S_D	T	$C_{TU} \cdot S_D$	I_s	q	F1	F2	F3	破壊形式
→ 正加力	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
← 負加力	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
Y 方向												
	階	ΣW (kN)	E_o	S_D	T	$C_{TU} \cdot S_D$	I_s	q	F1	F2	F3	破壊形式
→ 正加力	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
← 負加力	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
凡例 ※下記の記述は参考例である。												
CB 曲げ柱 : CS せん断柱 : CSS 極脆性柱 CWB 壁付曲げ柱 : CWS 壁付せん断柱 : CWSS 壁付極脆性柱 WB 曲げ壁 : WS せん断壁 : WR 回転壁 WWB 曲げそで壁 : WWS せん断そで壁												
特記事項 ※決定した方向などを記述する。												
※その他重要事項												
判定基準は以下とする (1) I_s が0.3未満又はqが0.5未満・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性が高い。 (2) (1)、(3)以外・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性がある。 (3) I_s がIso以上かつqが目標値以上・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性が低い。												
ゾーニングで検討を行っている場合はゾーニング図を添付してください。												

3.4 耐震改修建築物概要及び構造概要

(改修)

発注者		<u>〇〇〇</u>			
耐震改修	改修診断者	<u>〇〇〇</u>		※診断評価取得状況などを記述する。 ※改修報告書は発注者の承認を得ていることなどを記述する。	
	改修診断者住所	<u>〇〇〇</u>			
	改修診断年	<u>平成00年00月</u>			
	改修評価番号	<u>HA0 34-00-0000</u>			
建築物概要＊耐震改修	診断建物名称		<u>〇〇〇</u>		
	診断建物所在地		<u>〇〇〇</u>		
	診断建物設計者		<u>〇〇〇</u>		
	診断建物施工者		<u>〇〇〇</u>		
	診断建物規模	地上	<u>0</u>	階	建築物の特徴 ※診断評価取得後の経緯など記述する。 ※診断評価取得後の隣接建物の状況など記述する。
		地下	<u>0</u>	階	
		塔屋	<u>0</u>	階	
	診断建物竣工年		昭和 <u>00</u> 年		
	主要用途		<u>〇〇〇</u>		※その他重要事項
	建物形状	平面形	<u>〇〇〇</u>		
		立面形	<u>〇〇〇</u>		
	建物面積	建築面積	<u>0</u>	m ²	
		延べ面積	<u>0</u>	m ²	
		<u>0</u> 階	<u>0</u>	m ²	
	建物高さ	軒高さ	<u>0</u>	m	
<u>0</u> 階		<u>0</u>	m		
建物長さ	X方向	<u>0</u>	m		
	Y方向	<u>0</u>	m		
隣接建物		<u>〇〇〇</u>			

(改修)

構造概要＊耐震改修	構造種別		<u>〇〇〇</u>		構造の特徴
	架構形式	X方向	<u>〇〇〇</u>		※診断評価取得後の変更など記述する。
		Y方向	<u>〇〇〇</u>		※発注者との協議事項など記述する。
	スパン数	X方向	<u>0</u>	スパン	※診断評価取得後の隣接建物の状況など記述する。
		Y方向	<u>0</u>	スパン	
	スパン長	X方向	<u>0</u>	m (代表スパン)	
		Y方向	<u>0</u>	m (代表スパン)	
	極脆性柱	X方向	<u>極脆性柱の有無</u>		・ 極脆性柱の位置
		Y方向	<u>極脆性柱の有無</u>		
	下階壁抜け柱	X方向	<u>下階壁抜け柱の有無</u>		・ 下階壁抜け柱の位置
		Y方向	<u>下階壁抜け柱の有無</u>		
	大スパン梁	X方向	<u>大スパン梁の有無</u>		・ 大スパン梁の位置
		Y方向	<u>大スパン梁の有無</u>		
	持出し部材	X方向	<u>持出し部材の有無</u>		・ 持出し部材の位置
		Y方向	<u>持出し部材の有無</u>		
	層重量	<u>0</u> 階	<u>0</u>	kN	
	単位重量	<u>0</u> 階	<u>0</u>	kN/m ²	
	柱壁量	<u>0</u> 階	X方向 <u>0</u>	Y方向 <u>0</u>	
	基礎地盤	基礎形式	<u>〇〇〇</u>		
		長期支持力	<u>〇〇〇</u>		
		支持層	<u>〇〇〇</u>		
		支持深さ	<u>〇〇〇</u>		
		地盤種別	<u>〇〇〇</u>		
		敷地状況	<u>〇〇〇</u>		
	改修箇所及び方法		<u>〇〇〇</u>		※改修箇所、方法などを記述する。 ※その他重要事項

(改修)

使用材料・強度＊耐震改修	既存コンクリート	強度	設計基準強度	<u>0</u> N/mm ²	材料の特徴 ※診断評価取得後の変更など記述する。
		<u>0</u> 階	推定強度	<u>0</u> N/mm ²	
		中性化	基準値	<u>0</u> mm	
			測定値の最大 各階の中性化深さ	<u>0</u> mm	
	既存鉄筋	主筋 帯筋 あばら筋 壁筋 スラブ筋	材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
	既存鉄骨	柱 梁	材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
	改修コンクリート	<u>0000</u>	設計基準強度	0 N/mm ²	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
	改修鉄筋	主筋 その他	材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
	改修鉄骨	鉄骨	材質	降伏点強度	・鋼材の降伏点強度の根拠（割増の有無）
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
		ボルト	材質	引張強度	・鋼材の引張強度の根拠（割増の有無）
			<u>0000</u>	<u>0</u> N/mm ²	
	その他		<u>0000</u>		※その他重要事項

追加現地調査＊耐震改修	3.5 耐震改修概要		(改修)
	設計図書	<u>〇〇〇</u>	特記事項
	被災履歴	<u>〇〇〇</u>	※発注者との協議事項など記述する。
	図書の照合	<u>〇〇〇</u>	※診断評価取得後の追加調査などを記述する。
	ひび割れ劣化	<u>〇〇〇</u>	
	不同沈下	<u>〇〇〇</u>	※その他重要事項
	部材寸法	<u>〇〇〇</u>	
	基礎状況	<u>〇〇〇</u>	
	鉄骨部	<u>〇〇〇</u>	
	コンクリートブロック	<u>〇〇〇</u>	
	非構造部材	<u>〇〇〇</u>	
	その他	<u>〇〇〇</u>	

(改修)

モデル化および計算手法＊耐震改修	節点振り分け	<u>〇〇〇</u>	特記事項
	仮想仕事法	<u>〇〇〇</u>	<u>※診断評価取得後の変更など記述する。</u>
	荷重増分法	<u>〇〇〇</u>	<u>※その他重要事項</u>
	解析用外力分布	<u>〇〇〇</u>	
	剛床・ゾーニング	<u>〇〇〇</u>	
	部材内法寸法位置	<u>〇〇〇</u>	
	壁	<u>〇〇〇</u>	
	下階壁抜け柱	<u>〇〇〇</u>	
	軸力変動	<u>〇〇〇</u>	
	柱耐力	<u>〇〇〇</u>	
	梁耐力	<u>〇〇〇</u>	
	第2種構造要素	<u>〇〇〇</u>	
	偏心率の算出方法	<u>建防協のB法による。</u>	
	使用プログラム	<u>〇〇〇</u>	

3.6 耐震改修結果

(改修)

耐震改修診断基準	※診断基準は、採用した主たる基準を記述し、準拠した基準も列記する。			
耐震改修診断次数	〇〇〇			※発注者と協議を記述する。
耐震改修諸数値	地域係数： $Z = 0.00$ 用途係数： $U = 0.00$ 地盤指標： $G = 0.00$ 振動特性係数： $R_t = 0.00$ 経年指標： $T = 0.00$ RC造： $S_T = 0.00$ 形状係数 S_D は建防協のB法とする 外力分布補正係数はAi分布とする。			※発注者と協議を記述する。
	RC造： $I_s = E_o \cdot T \cdot S_D / (Z \cdot R_t \cdot G)$			
	RC造： $q = C_{TU} \cdot S_D / (S_T \cdot Z \cdot G)$			
耐震改修判定指標	$I_{so} = 0$ $q \geq 0$			※発注者と協議を記述する。
耐震改修結果	X方向			考察
	階	I_s 値	q値	判定
	1階	0.00	0.00	〇〇〇
	Y方向			・第二種構造要素
				・極脆性柱
	階	I_s 値	q値	判定
	1階	0.00	0.00	〇〇〇
	特記事項			・下階壁抜け柱
				・判定結果考察
	※下記の項目などを記述する。			
	・コンクリート強度			
	・地盤			
	・コンクリートブロック			
	・非構造部材			
	・隣接建物			
	・大スパン			
	・持出し梁			
	・鉄骨			
	・詳細な調査の必要性			
	・改修の必要性			
	・補修の必要性			
	・その他重要事項			

上段の診断結果は診断時評価書の診断結果を記載してください。

耐震改修結果内訳

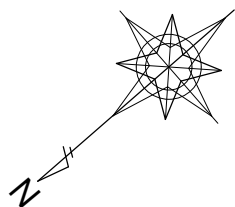
(改修)

X 方向 ※上段は診断結果、下段は改修結果を示す。												
	階	ΣW (kN)	E_o	S_D	T	$C_{TU} \cdot S_D$	I_s	q	F1	F2	F3	破壊形式
→ 正加力	0階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
← 負加力	0階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS

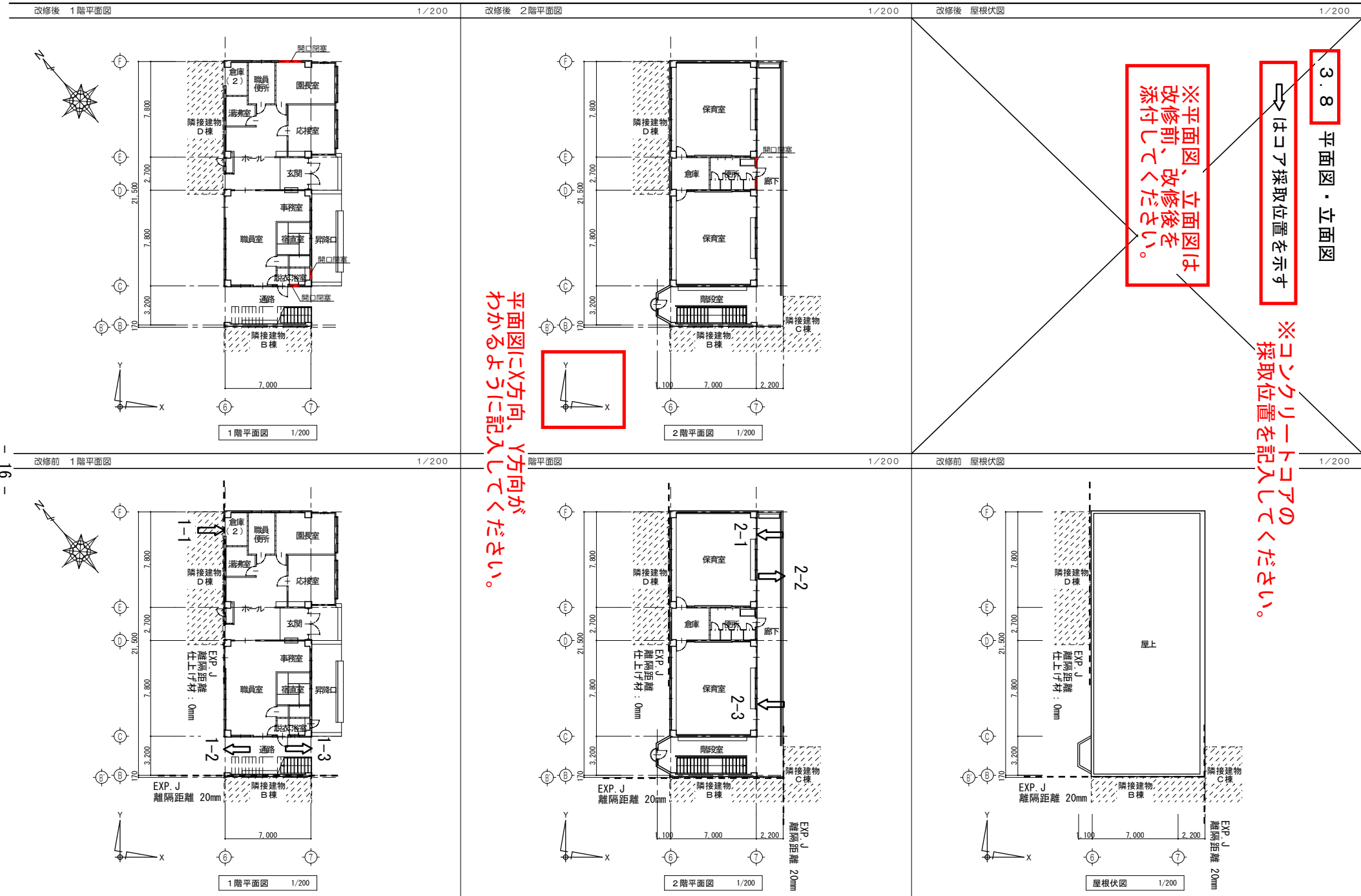
Y 方向 ※上段は診断結果、下段は改修結果を示す。												
	階	ΣW (kN)	E_o	S_D	T	$C_{TU} \cdot S_D$	I_s	q	F1	F2	F3	破壊形式
→ 正加力	0階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
← 負加力	0階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
	1階	0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS
		0.0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	CB. WB. WS

凡例 ※下記の記述は参考例である。 CB 曲げ柱 : CS せん断柱 : CSS 極脆性柱 CWB 壁付曲げ柱 : CWS 壁付せん断柱 : CWSS 壁付極脆性柱 WB 曲げ壁 : WS せん断壁 : WR 回転壁 WWB 曲げそで壁 : WWS せん断そで壁 V I ブレース軸降伏 : V II ブレース接合部破壊 : VR ブレース回転												
特記事項 ※決定した方向などを記述する。 ※その他重要事項												
判定基準は以下とする (1) I_sが0.3未満又はqが0.5未満・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性が高い。 (2) (1)、(3)以外・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性がある。 (3) I_sがIso以上かつqが目標値以上・・・地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、または崩壊する危険性が低い。												
ゾーニングで検討を行っている場合はゾーニング図を添付してください。												

3.7



1/400



3.8

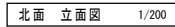
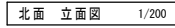
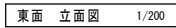
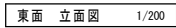
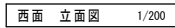
平面図・立面図

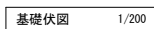
→ はコア採取位置を示す

※平面図、立面図は改修前、改修後を添付してください。

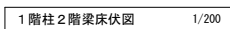
※コンクリートコアの採取位置を記入してください。

平面図にX方向、Y方向がわかるように記入してください。

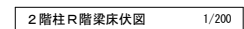




基礎伏図 1/200

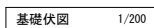


1 階柱 2 階梁床伏図



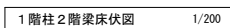
2階柱R階梁床伏図

3.9 伏図・軸組図・改修後詳細図



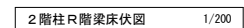
基礎伏図 1/200

・  は土間コンクリートを示す。
厚さ 150
配筋 D10@200 シングルクロス



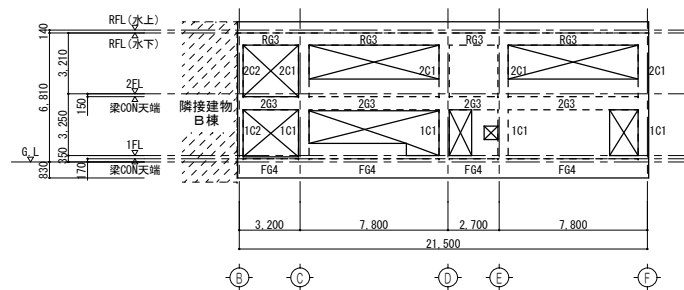
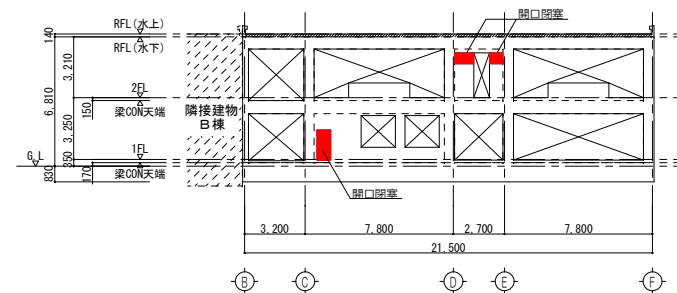
1 階柱 2 階梁床伏図	1/200
--------------	-------

特記なき壁は W15 とする



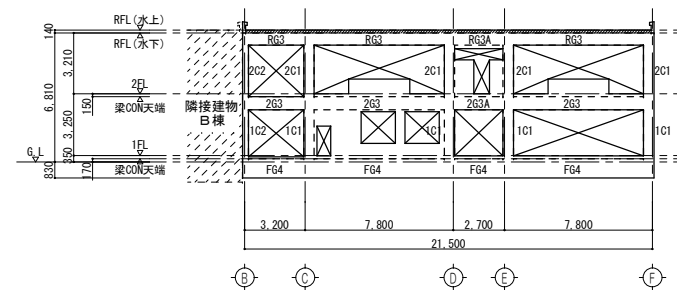
2階柱R階梁床伏図

特記なき壁は W15 とする



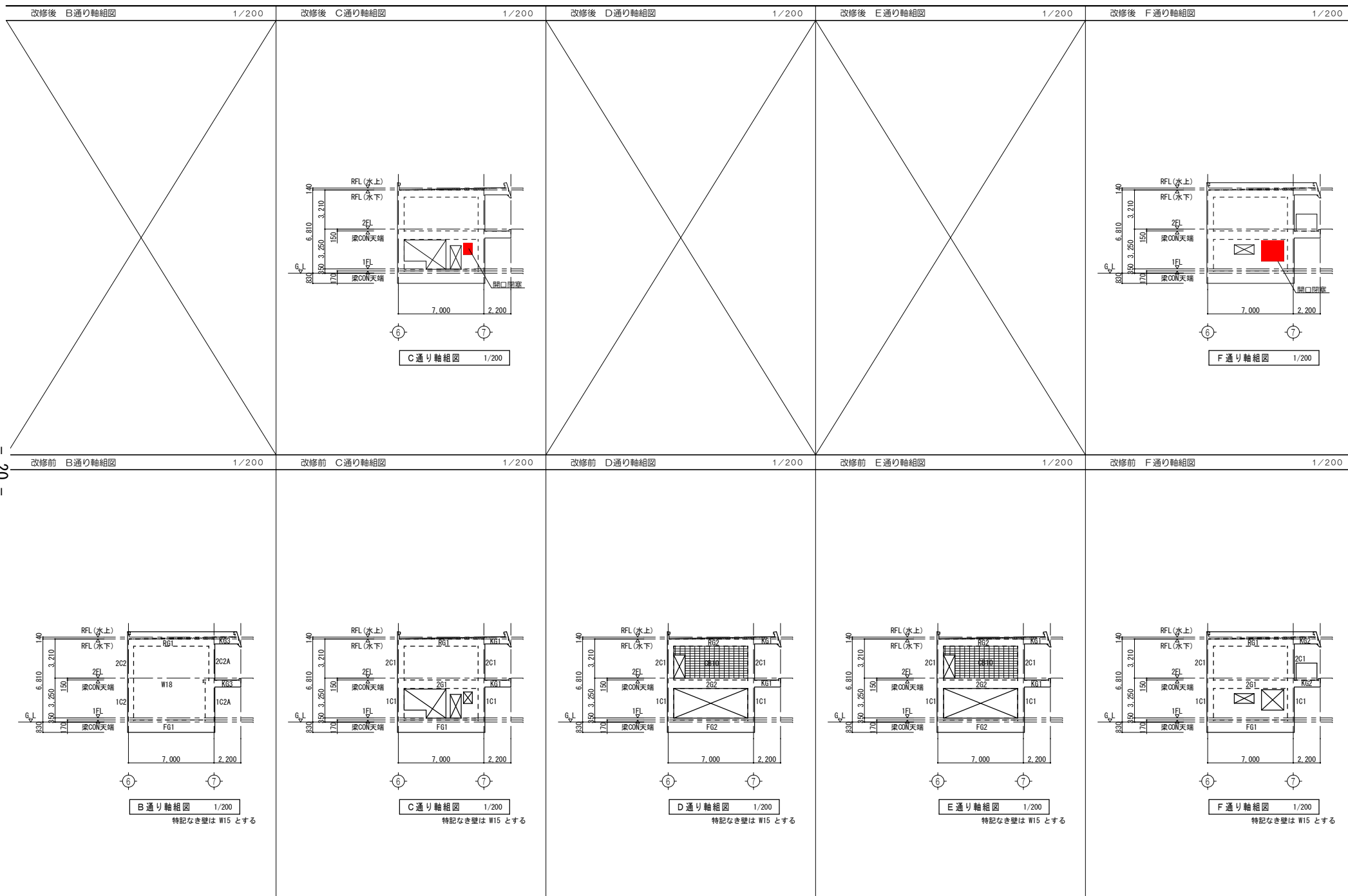
6 通り軸組図 1/200

特記なき壁は W15 とする



7 通り軸組図 1/200

特記なき壁は W15 とする



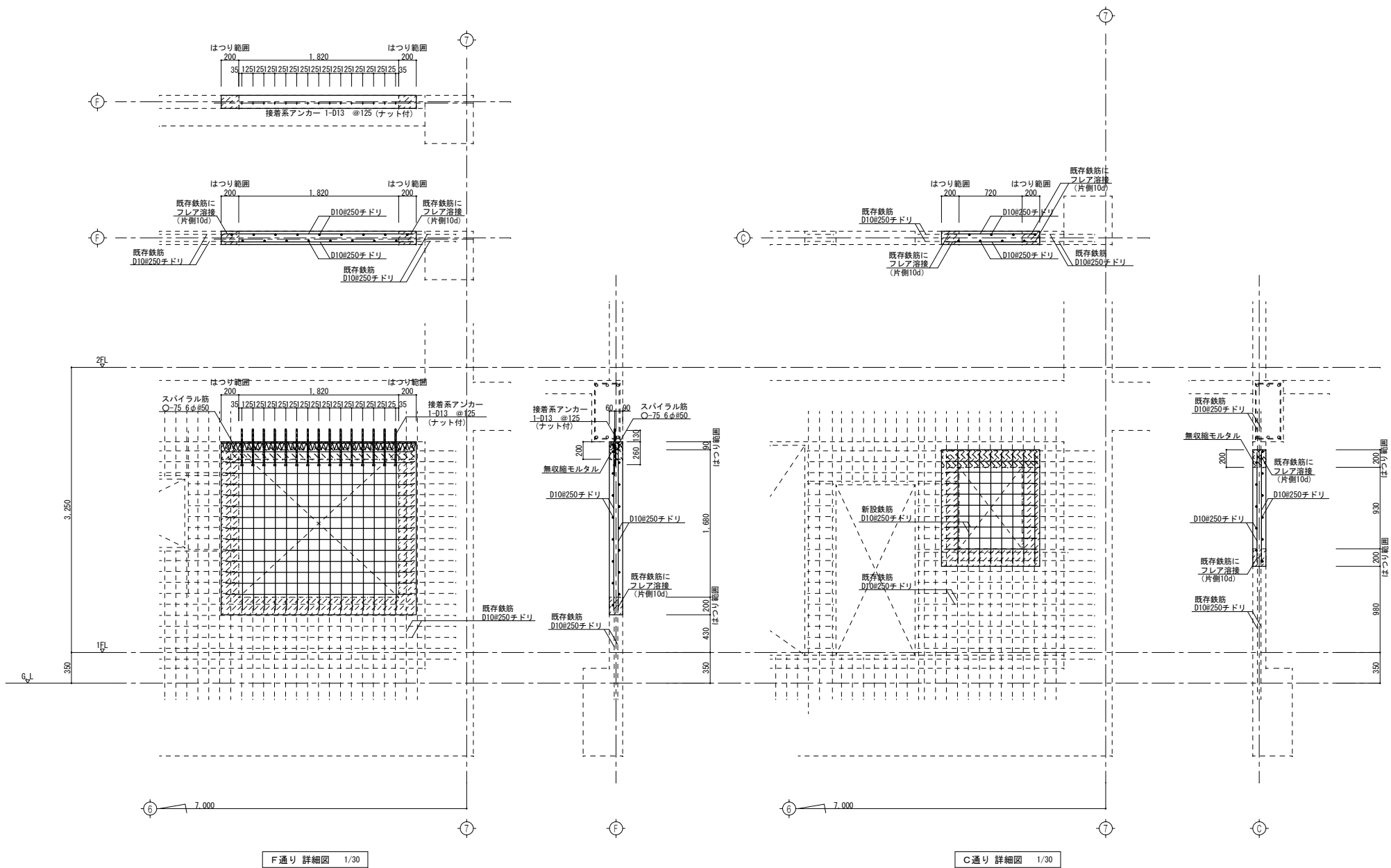
B通り軸組図 1/200
特記なき壁は W15 とする

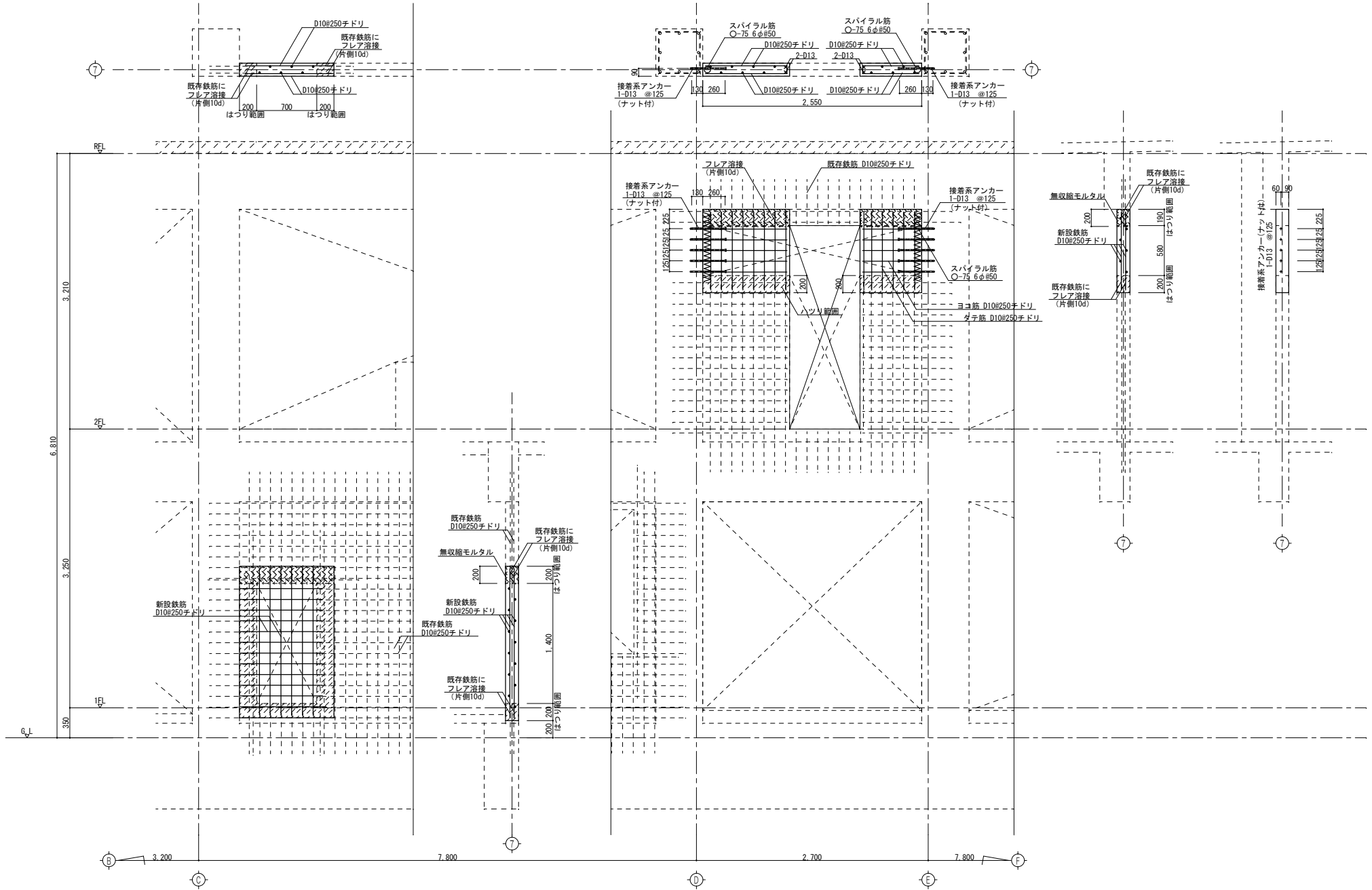
C通り軸組図 1/200
特記なき壁は W15 とする

D通り軸組図 1/200
特記なき壁は W15 とする

E通り軸組図 1/200
特記なき壁は W15 とする

F通り軸組図 1/200
特記なき壁は W15 とする





鉄骨下枠組 | 行う | 行いたい | おと協下ア、カーポII、ト空の枯園全れ

28

あと施工アンカーの試験

あと施工アンカーの試験方法

[8. 11. 4] [8. 11. 5]

現場施工されたあと施工アンカーは、全数の打音検査により、その固着度を確認する。これらは原則として監督職員立会いのもとで行うものとする。

また、1日に施工されたものの各径ごとを1ロットとし、この中から3本以上について、非破壊引張試験により固着度を確認する。載荷は設計用引抜き耐力の3分の2の荷重までとし、抜け出さないものを合格と判定する。

なお、部位は柱・梁上下が全体でほぼ同数となるようにサンプリングする。

A棟

kN/本

方向	通り	階	軸間	部位	7ヶ所記号	設計用せん断耐力	設計用引抜き耐力	確認用引抜き耐力	備考
X	F	1	6～7	W15 開口閉塞	D13	26.2	29.0	19.3	Fc=20.6N/mm ²
Y	7	2	D～E	W15 開口閉塞	D13	26.2	29.0	19.3	Fc=20.6N/mm ²

D棟

kN/本

方向	通り	階	軸間	部位	7ヶ所記号	設計用せん断耐力	設計用引抜き耐力	確認用引抜き耐力	備考
Y	5	1	D～F	柱脚	M20	51.6	39.6	26.4	Fc=20.6N/mm ²

29

増打ち壁に用いるシアコネクタ

場所打ちコンクリート壁の増打ちに用いる既存部とのシアコネクタ

種類 ※「24 あと施工アンカーの材料」による ・金属系アンカー

間隔 (mm) ※500×500 ・図示

[8. 3. 7]

30

増設・補強工事のコンクリートの打ち込み

工法の種類

流し込み工法または圧入工法

[8. 19. 8] [8. 21. 5]

31

柱補強

溶接金網巻き工法及び溶接閉鎖フープ巻き工法

柱頭注脚の隙間部間の形状

※ポリスチレンフォーム保温材等を埋込む ・図示

[8. 21. 5]

32

連続繊維シート巻き

材料・形状

採用した工法の規定を満足するもの

材質

引張り強度 (含浸硬化後)

・3400MPa

ヤング係数 (含浸硬化後)

・(230+39)～(230-20)GPa

工法

※(財)日本建築防災協会の評価を受けた工法

[8. 21. 7]

下地調整

[8. 21. 7]

仕上げモルタルの除去

※行う ・行わない

柱の隅角部の面取り

※工法の評価内容による

33

スリットの施工

スリット部の配管等の探査

※探査器により探査し、配管等の位置の墨出を行う

・はつり出し

[8. 22. 2]

スリットの幅及び深さ

◎図示による。 ・

スリットの耐火、遮音、防水処理への配慮

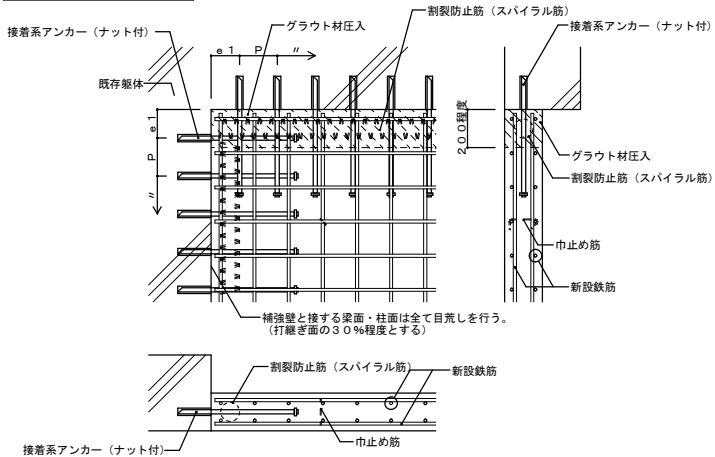
適用箇所 ◎図示による ・

仕様 ◎図示による ・

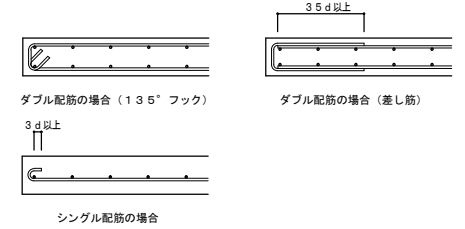
補 強 要 領 図

1. あと施工アンカー
イ) あと施工アンカーの間隔 d a : アンカー筋の外径
- a) シングル配筋 b) チドリ配筋 c) ダブル配筋
- ピッチ (P) : 7.5da以上かつ30cm以下
ゲージ (g) : チドリ配筋の場合4da以上
ダブル配筋の場合は5.5da以上
はしあき (e1) : 5da以上かつピッチ以下
へりあき (e2) : 2.5da以上かつ主筋の内側に入れる。
- ロ) あと施工アンカーの埋込み深さ及び接合筋の定着長さ
接着系アンカー (異形鉄筋ナット付)
- 標準
L e : 有効埋込み長さ 10 d a
L 1 : 埋込み深さ (孔深さ) 11 d a
L 2 : 接合筋の定着長さ 20 d a
開口補強用
L e : 有効埋込み長さ 15 d a
L 1 : 埋込み深さ (孔深さ) 16 d a
L 2 : 接合筋の定着長さ 40 d a
2. スパイラル筋 形状は下記による。
注) 継手は重ね2巻以上とする。
- | 壁 厚 | 3ヶ所筋 | 外径 | ピッチ | 形状 |
|-----|------|------|------|--------|
| 120 | 6φ | 60φ | 50以下 | シingle |
| 150 | 6φ | 75φ | 50以下 | シingle |
| 180 | 6φ | 100φ | 50以下 | シingle |
| 200 | 6φ | 120φ | 50以下 | シingle |
| 250 | 6φ | 170φ | 50以下 | シingle |
| 300 | 6φ | 120φ | 50以下 | ダブル |
| 350 | 6φ | 150φ | 50以下 | ダブル |
3. グラウト材の圧入
既設躯体の下端と後打ちコンクリートの上端との間には、グラウト材を圧入する。
4. 注意事項
イ) 材料の加工に先立ち躯体寸法を実測し、実状に合った寸法に加工する。
ロ) 増設部分と既存コンクリート躯体との接触面については既存コンクリート躯体面を目荒しを行い、コンクリート打設前に十分な水湿しを行う。
ハ) コンクリートの打設は外部新動機、バイブレーター、又はタタキ等により密実なコンクリートとなるように十分な施工計画を立てる。
ニ) 増設壁は梁下20cm程度まで打設し頂部はグラウト材を圧入する。
ホ) コンクリートの強度発現期間内は十分な湿度状態で養生する。また養生期間中は振動及び衝撃を与えないように注意する。

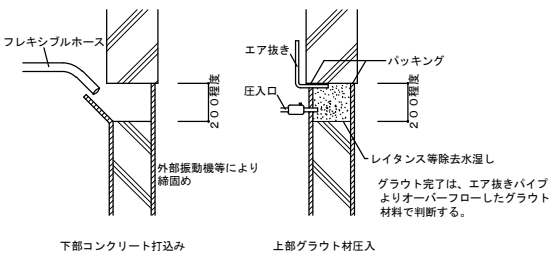
新設耐震壁による補強



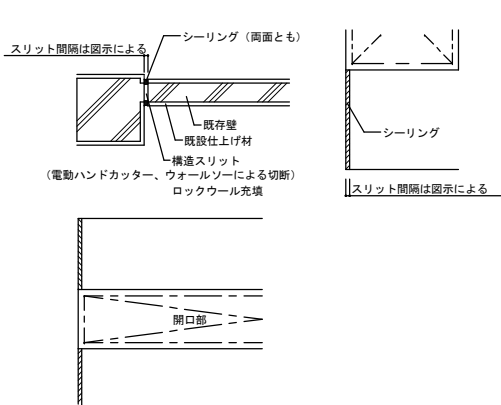
開口部端配筋要領



コンクリート及びモルタル圧入要領



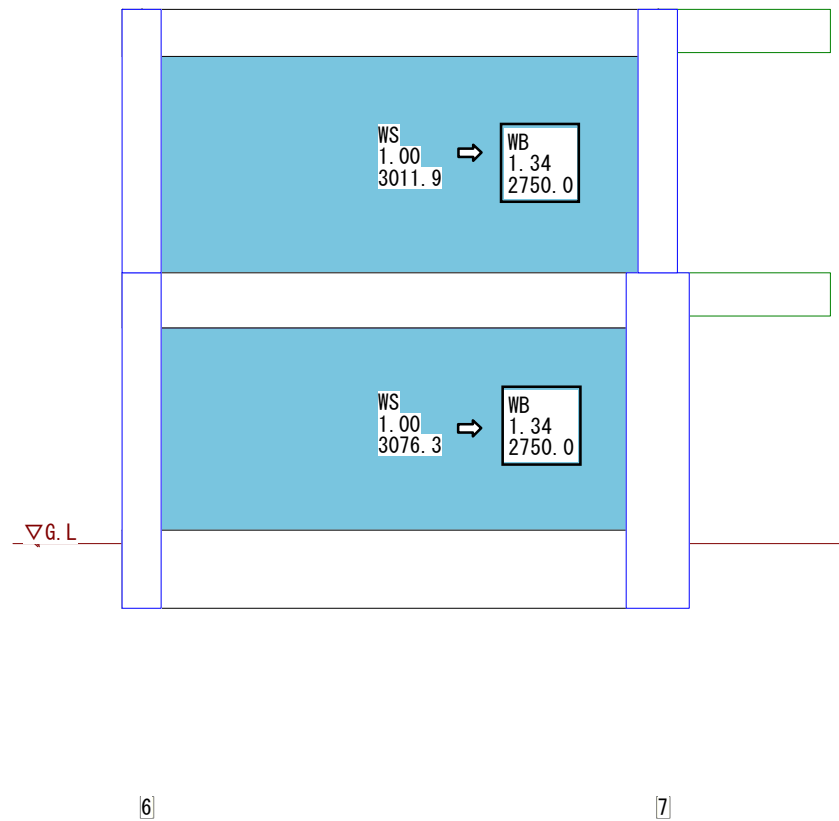
構造スリット (腰壁・垂壁) 施工要領図



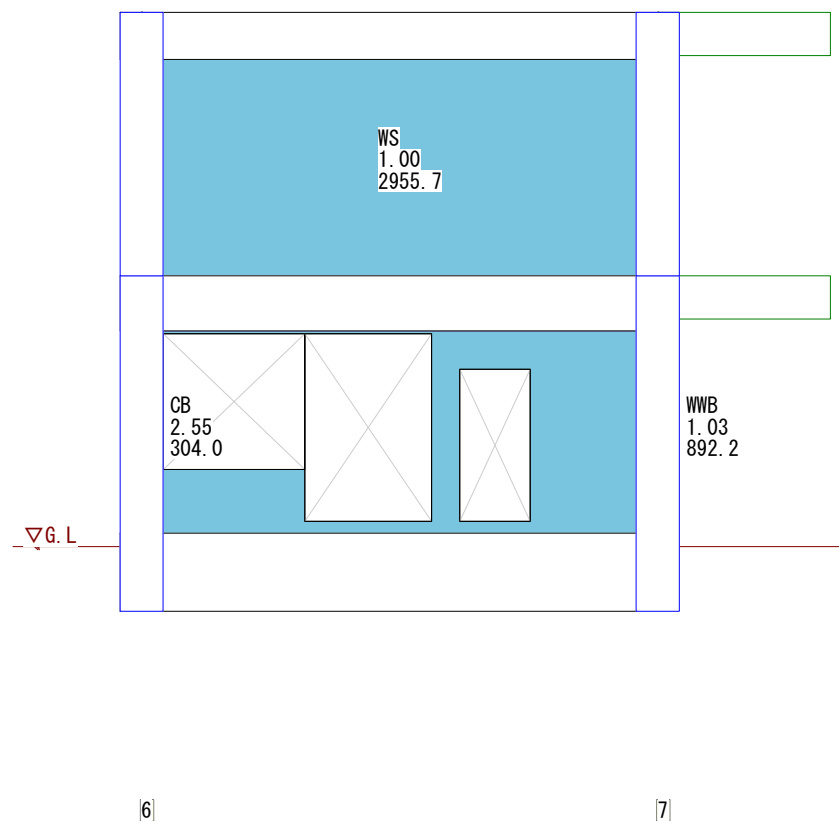
3.10 破壊形式図

破壊モード図 — 2次診断Ⅰ
[B]フレーム(X)

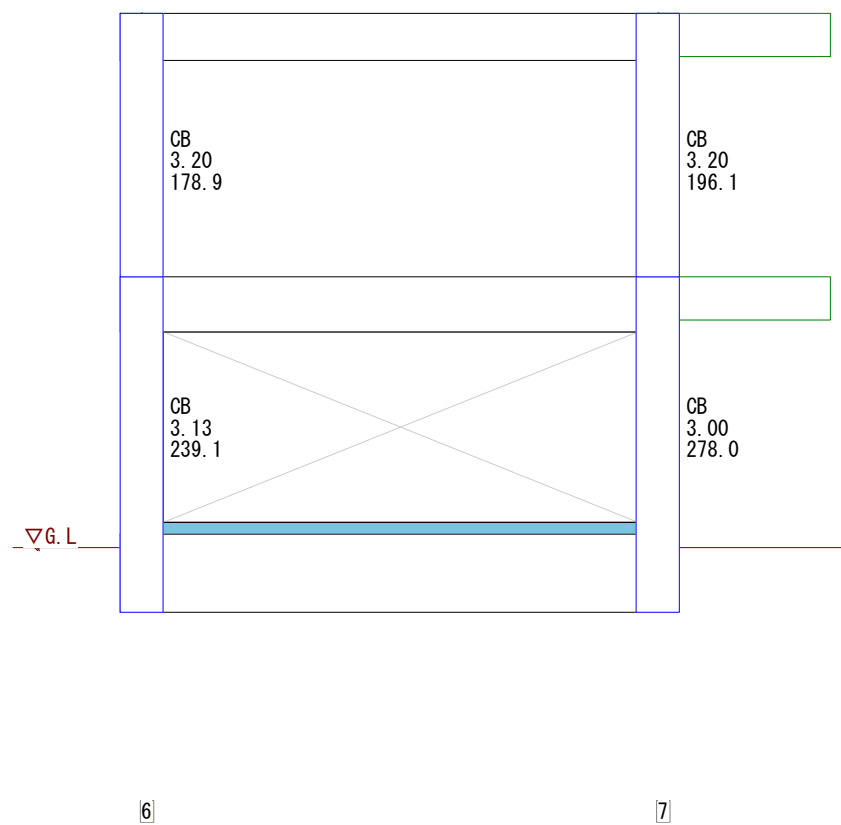
破壊形式図は、改修後のものを添付してください。



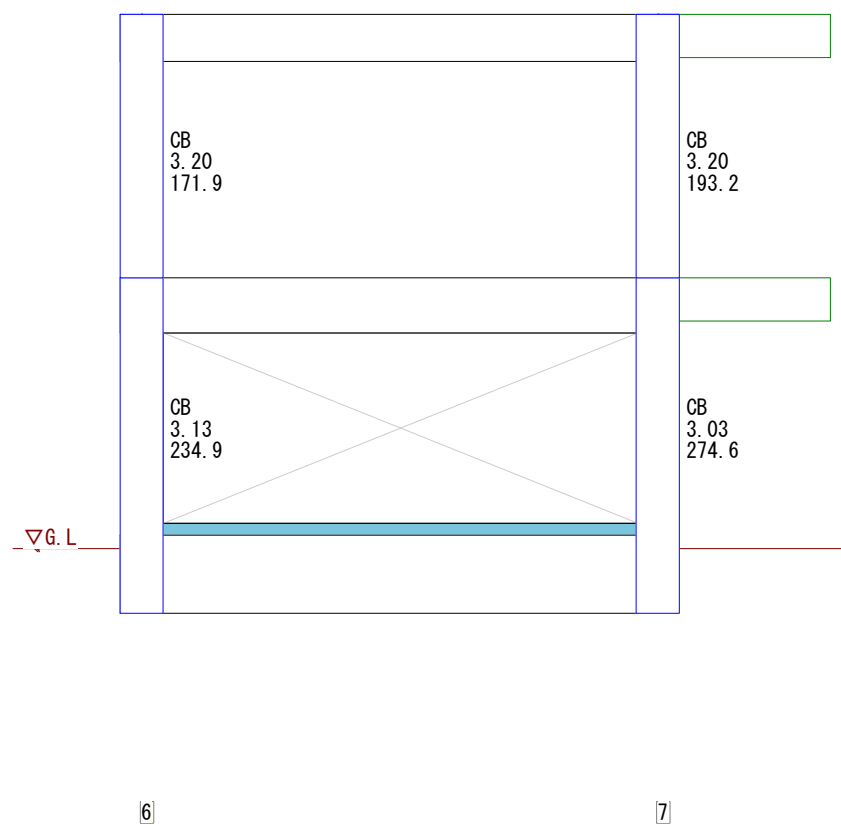
破壊モード図 — 2次診断Ⅰ X方向正加力]
[C]フレーム(X)



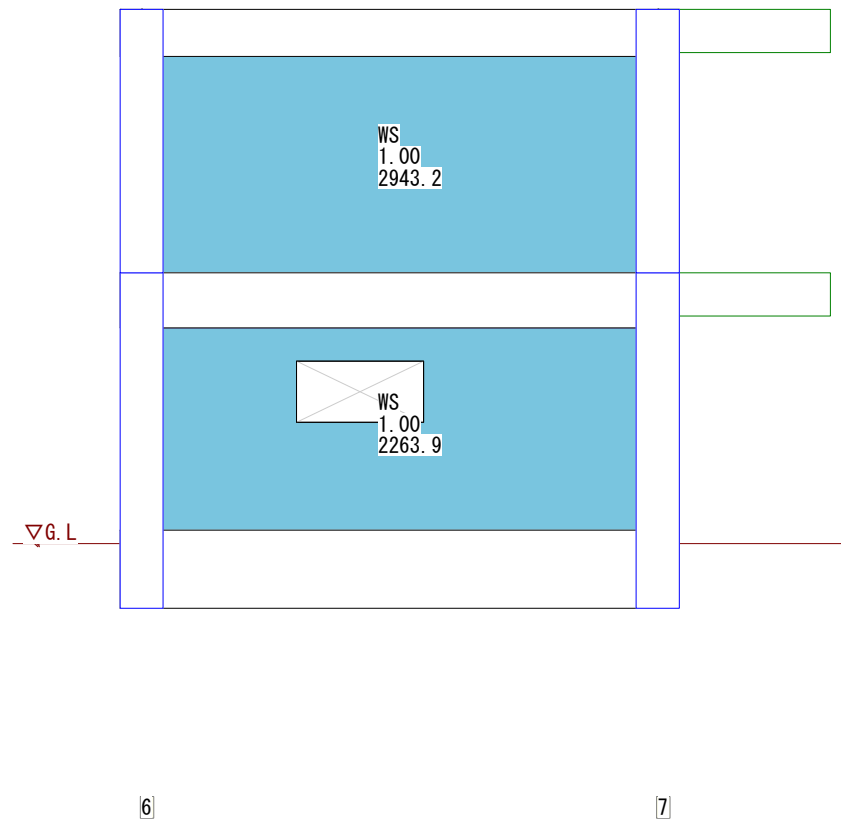
破壊モード図 ー 2次診断[X方向正加力]
[D]フレーム(X)



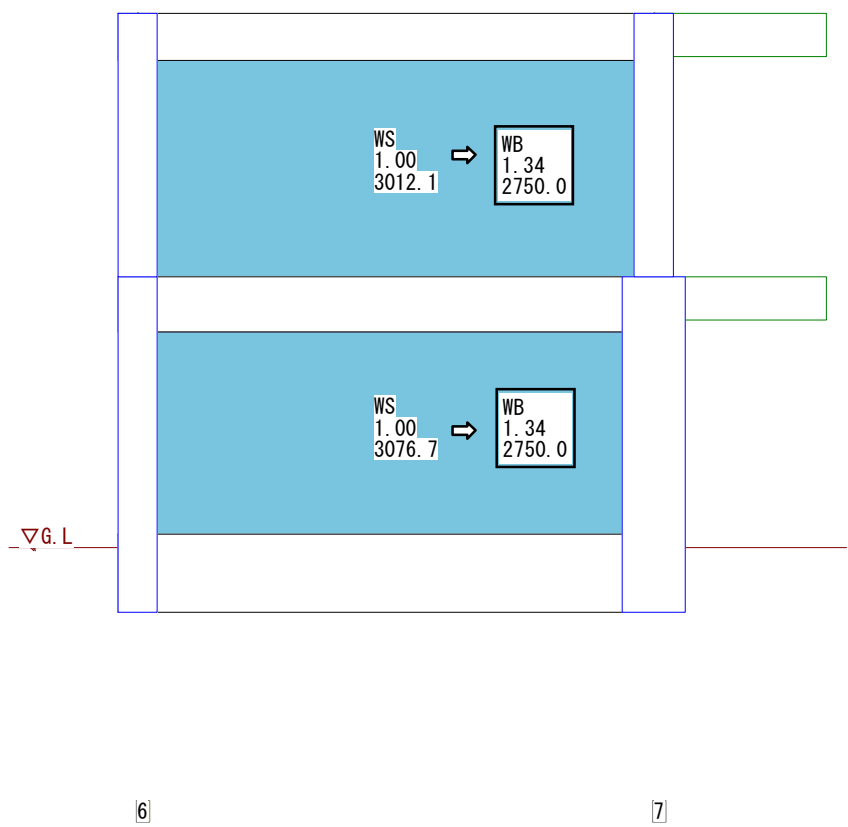
破壊モード図 ー 2次診断[X方向正加力]
[E]フレーム(X)



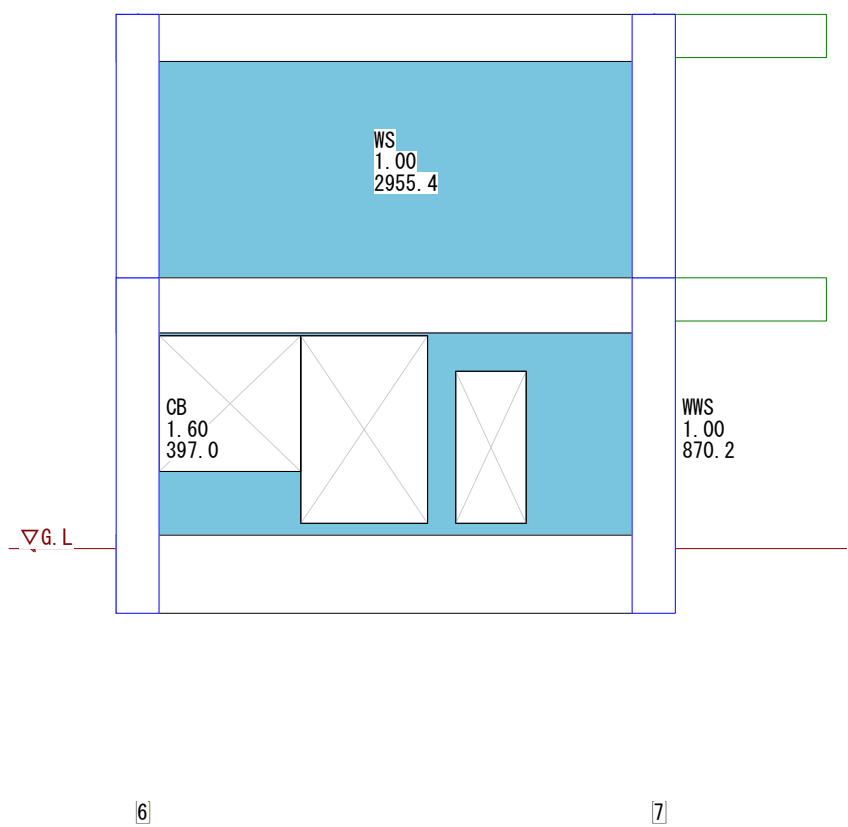
破壊モード図 - 2次診断[X方向正加力]
 [F]フレーム(X)



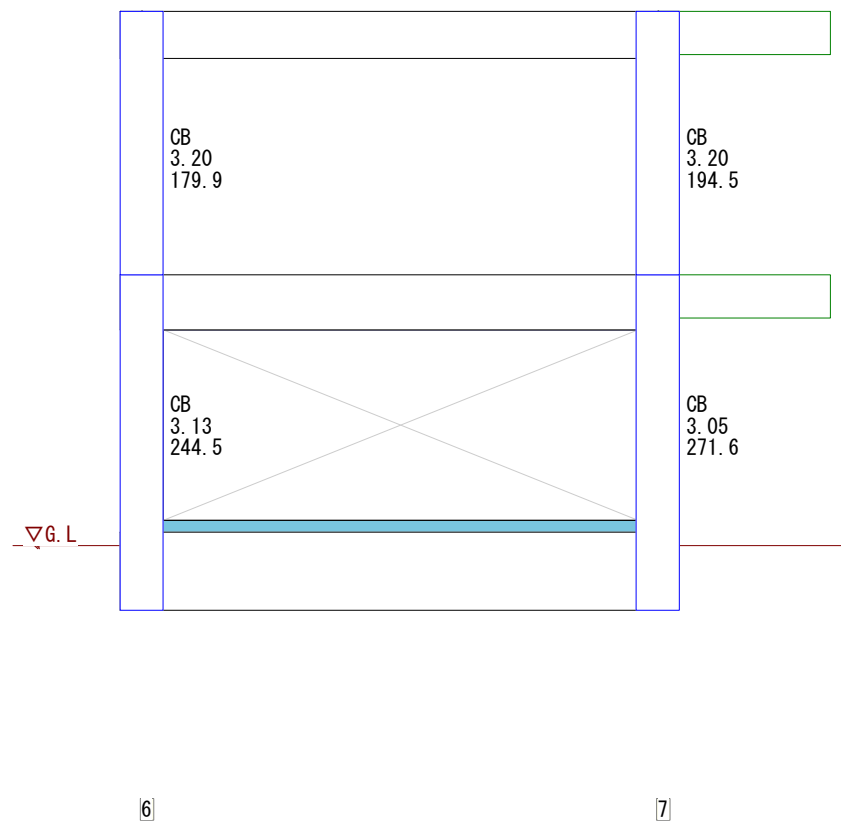
破壊モード図 - 2次診断[X方向負加力]
[B]フレーム(X)



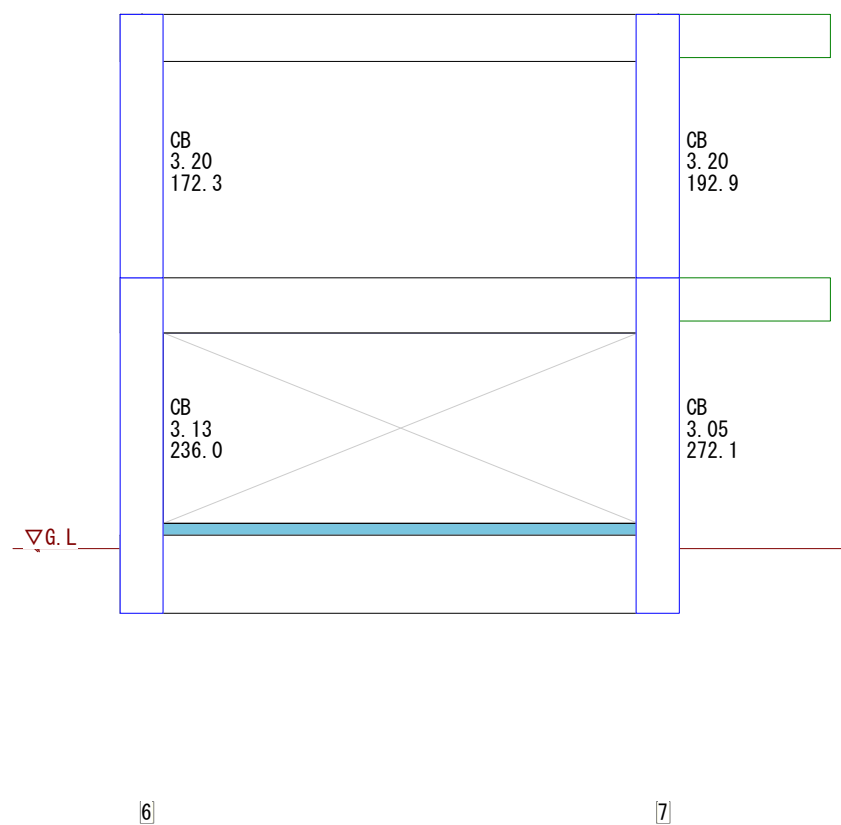
破壊モード図 - 2次診断[X方向負加力]
[C]フレーム(X)



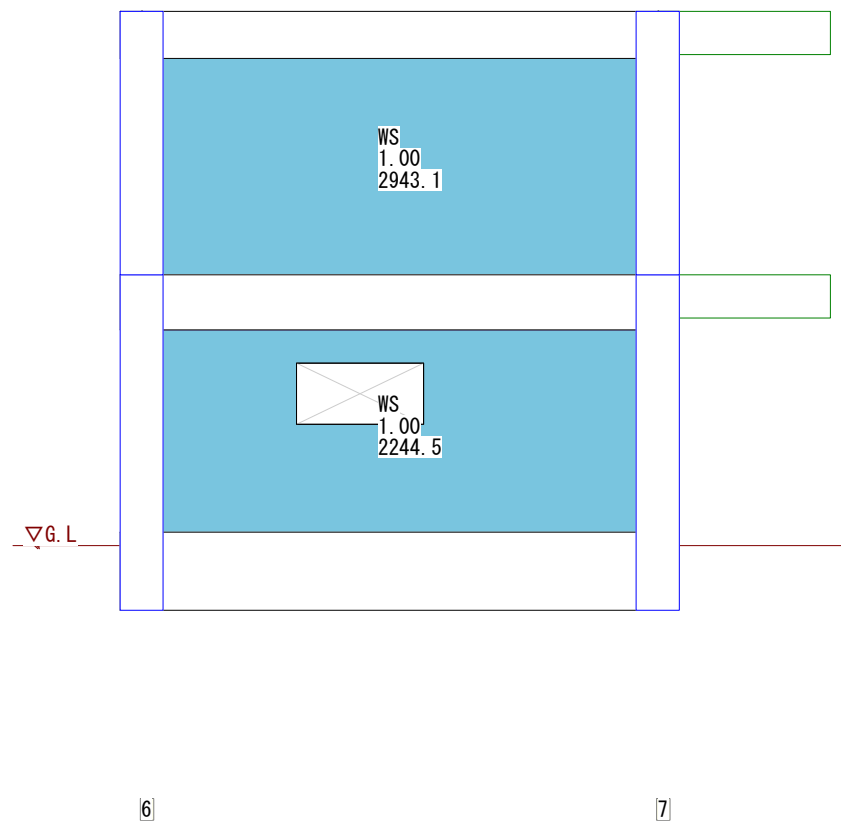
破壊モード図 - 2次診断[X方向負加力]
 [D]フレーム(X)



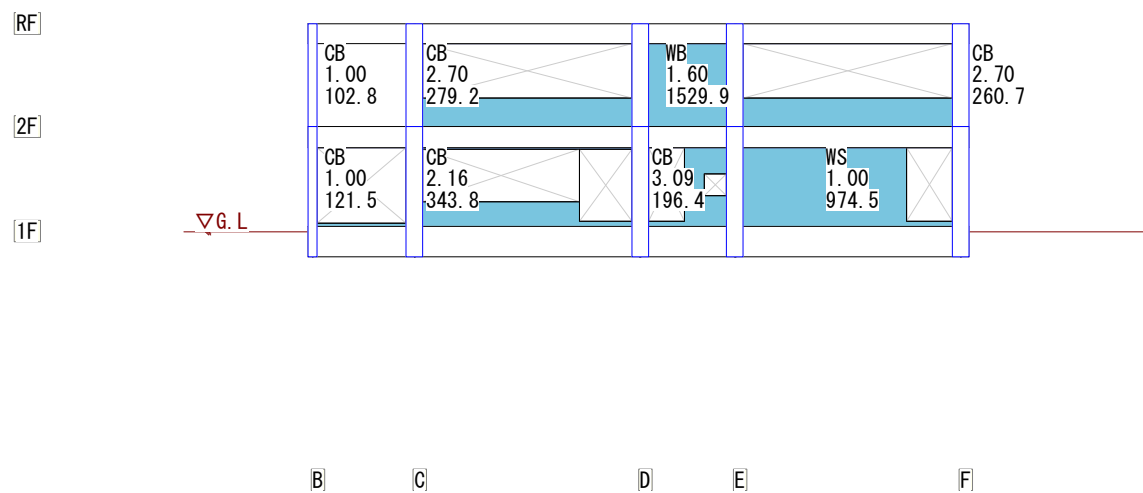
破壊モード図 - 2次診断[X方向負加力]
 [E]フレーム(X)



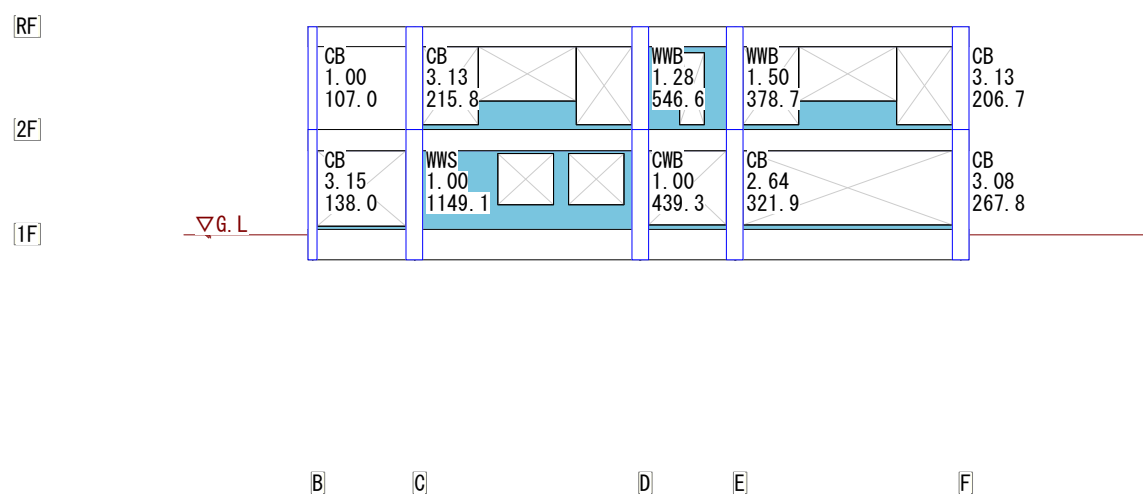
破壊モード図 - 2次診断[X方向負加力]
 [F]フレーム(X)



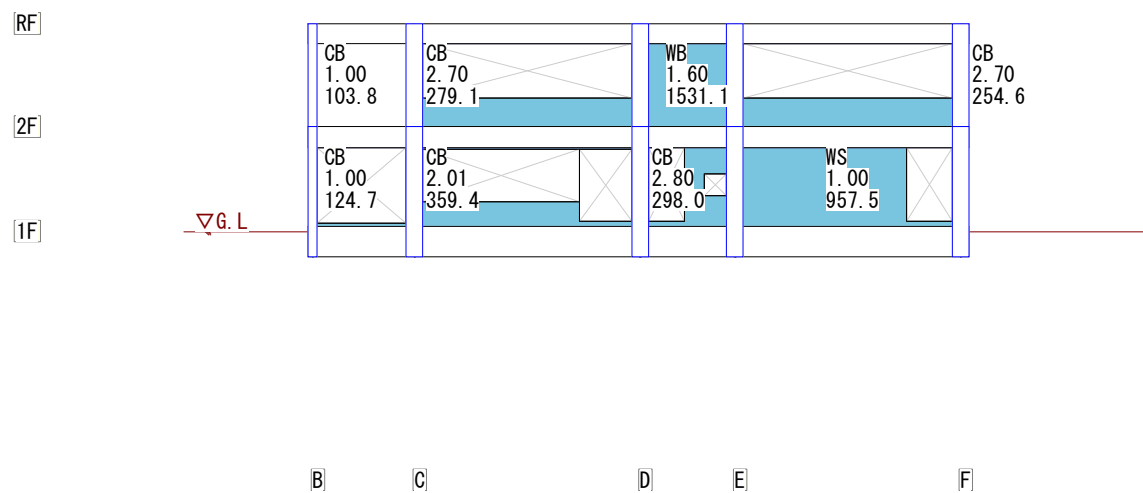
破壊モード図 — 2次診断[Y方向正加力]
[6]フレーム(Y)



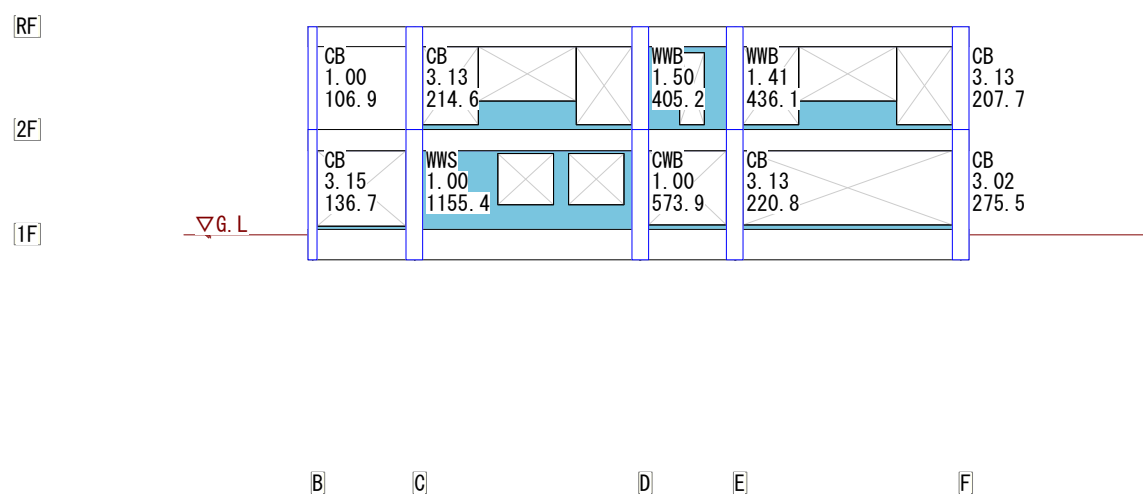
破壊モード図 — 2次診断[Y方向正加力]
[7]フレーム(Y)



破壊モード図 — 2次診断[Y方向負加力]
[6]フレーム(Y)



破壊モード図 — 2次診断[Y方向負加力]
[7]フレーム(Y)



第〇〇〇-〇回 (一社)広島県建築士事務所協会建築物耐震診断等評価委員会 質疑回答書

No. 1 (評価委員会 ・ 小委員会)

件名	〇〇〇〇〇 耐震改修業務	棟番号	〇〇	オブザーバー	〇〇	場所	建築サロン
日時	平成 〇 年 〇 月 〇 日	担当事務所	〇〇〇〇〇	説明者	〇〇	記録者	〇〇

○印は出席委員

評価委員								
委員長	荒木	○	副委員長	藤原	○	委員	浜口	○
副委員長	貞末	○	委員	高西	○	委員	赤尾	
委員	近藤		委員	金井		委員	垣本	
委員	大田		委員	清水	○	委員	三好	
委員	高松		委員	坂内				
委員	清水(斉)	○						

番号	頁	質 疑 事 項	回 答	処 置
1	I -6	・診断時、特記事項において、西側D棟とは鉄骨でつながっているため、改修時には詳細な検討が必要と思われる。と記載してあるが、詳細な検討は行っていますか。	・特記事項及び方針にに記載します。	・特記事項及び方針にD棟との件を記載しました。 (I -13、VI-2)
2	I -10	・改修鉄筋にスパイラル筋を追加してください。	・追加します。	・スパイラル筋について記載しました。 (I -10)
3	I -13	・改修結果考察について、(X方向)極脆性柱解消の開口閉塞による補強で目標値を満足している。と記載しているが、X方向はもとも満足しており、このたびの改修では極脆性柱の改修ですので、文言を修正したほうが良いのではありませんか。	・考察の表現を見直します。	・考察のコメントを見直しました。 (I -13)
4	I -14	・耐震改修結果内訳、XY方向とも2階のC値の値を再確認してください。	・修正します。	・C値を修正しました。 (I -14)
5	I -28～	・構造図、図中に使用材料等の記載がありません。構造特記仕様書等があれば添付してください。	・構造特記仕様書を添付します。	・構造特記仕様書を添付しました。 (I -22-1,2)
6	I -21 I -22	・補強詳細図、あと施工アンカーの定着が20dのため、ナット付としてください。	・ナット付にします。	・ナット付に修正しました。 (I -21,22)
7		・診断時の議事録を添付してください。	・添付します。	・議事録を添付しました。 (Ⅷ-24～)
8	I -13	・特記事項にもコンクリートブロックについて記載してください。	・特記事項に記載します。	・特記事項にコンクリートブロックの件を記載しました。 (I -13)
9	I -13	・EXP.Jについて、D棟についても記載してください。	・D棟についても記載します。	・D棟も加えたコメントに修正しました。 (I -13)
10	V -1	・D棟とのつながりについての現地調査に記載してください。	・現地調査に記載します。	・現地調査に記載しました。 (V -1、2)
11	I -14	・破壊形式の文字が重なっています。修正してください。	・修正します。	・破壊形式図の凡例の文字を修正しました。 (I -14)

※参考例

修正前				修正後			
X方向				X方向			
階	I s値	q値	判定	階	I s値	q値	判定
2階	0.89	1.00	両方満足	2階	0.75	2.55	両方満足
1階	1.01	1.51	両方満足	1階	0.68	1.51	両方満足
Y方向				Y方向			
階	I s値	q値	判定	階	I s値	q値	判定
2階	3.30	11.33	両方満足	2階	3.30	11.33	両方満足
1階	2.33	8.00	両方満足	1階	2.33	8.00	両方満足

エキスパンションジョイントを考慮しF値の見直しを行った結果、X方向の1、2階でIs値、2階でq値の変更がありましたので、修正前と修正後を左記に示します。

※修正を行ったことで、
ls 値、q 値が変更になった場合、
主な変更理由と修正前と修正後の、ls 値、q 値が
わかるように記載してください。
変更がない場合は、上記のように
ls 値、q 値に変更「ls 値、q 値に変更なし」
と記載してください。

第 1 回 (一社)広島県建築士事務所協会建築物耐震診断等評価委員会 質疑回答書

No. 1 (・ 評価委員会 ・ 小委員会)

件名	〇〇〇〇〇 耐震改修業務	棟番号	〇〇	オブザーバー	〇〇	場所	建築サロン
日時	平成 〇 年 〇 月 〇 日	担当事務所	〇〇〇〇〇	説明者	〇〇	記録者	〇〇

○印は出席委員

評価委員							
委員長	荒木	○	副委員長	藤原	○	委員	浜口
副委員長	貞末	○	委員	高西	○	委員	赤尾
委員	近藤		委員	金井		委員	垣本
委員	大田		委員	清水	○	委員	三好
委員	高松		委員	坂内			
委員	清水(吉)	○					

番号	頁	質 疑 事 項	回 答	処 置
		第〇〇-〇回評価委員会での質疑回答の確認を行った。		
		その他なし。		